

田野村 忠 温

1 はじめに

等しく「推量の助動詞」の名で呼ばれることのある現代日本語の「らしい」と「ようだ」については、その意味・用法の相違の問題がこれまでに何度も取り上げられてきた。

この問題に関する比較的早い時期の記述としては、一般にほとんど知られていないもののようであるが、湯沢幸吉郎氏の執筆による『日本語表現文典』がある。同書で湯沢氏は、「らしい」を「何等かの根拠から推定する意味を表すのに用ひる語」とし、「らしい」と「ようだ」の意味の違いを次のように説明しておられる。¹⁾

「やうだ」は「らしい」と殆んど同じ意味を表すが、「らしい」は推して考へた結果を正確に断定する形を避けて、余裕のある言ひ方をなす場合に用ひるに対して、「やうだ」は推考を用ひず、客観の情勢をそのまま受け容れて、「さう見える」「さう思はれる」の意味を表す場合に用ひる。

必ずしも「らしい」と「ようだ」の違いを問題としているわけではないが、基本的に湯沢氏の記述に一致すると考えられる見解は、その後の文法書や論文の中にも散見される。例えば、時枝誠記氏は、「だろう」との比較においてであるが、「らしい」を、「或る客観的な状況」を根拠とした「現在起こつてゐる事実に対する推量」を表現するものとしておられる。また、阪倉篤義氏は、古典語の「めり」について、「『……のふうだ』『……の様子だ』『……と見える』といった程度の推量で、たゞ表現を婉曲にするためだけに用いたような場合もあります」と述べた上で、「めり」と「ようだ」の関連を示唆しておられる。近年では、森田良行氏、中畠孝幸氏などの論考が基本的に同じ立場に立つものと見られる。²⁾

さて、こうした旧来の記述はいずれも、「らしい」と「ようだ」の基本的な意味そのものを把握することを意図するものと言ってよいと思われるが、昨今においては、これとは多少とも異なる方向の分析が盛んに試みられている。それは、「らしい」と「ようだ」がいずれもある根拠に基づいた推量を表すものだということは前提とし、そのうえで両者を区別するために必要な抽象的な意味特性を見出そうとする方向である。この火付け役を果たしたのは寺村秀夫氏の議論であるが、その後、柏岡珠子、柴田武、長島善郎、早津恵美子その他の諸氏による論考が相次ぐ形で発表されている。³⁾

しかし、寺村氏に端を発するこの新しい研究の流れは、我々を問題についての真の理解に導

くものではないように筆者には思われる。無論、異なる視点の導入によって新たな知見が得られるという可能性はあり、したがって、そうした研究がまったく不毛な方向を目指しているなどと言うつもりはない。しかしながら、始めから「らしい」と「ようだ」を同種のものとして——つまり、両者の基本的な性格の相違を不問にして——、専ら特定の抽象的な意味特性という視点から両者を比較したのでは、見るべき両者の個性が覆い隠されてしまうことになると思われるのである。

2 「らしい」「ようだ」の基本的な意味

結論を先に述べれば、上に引用した湯沢氏の記述こそ、「らしい」と「ようだ」それぞれの意味をよく捉えており、その意味・用法の相違を考えるうえでも考察の拠り所とすべきものであると筆者は考える。実質上湯沢氏らの記述の繰返しになるが、表現を整理して、この小論の結論とするところを次のようにまとめておく。

「らしい」の基本的な意味：

ある根拠から、(既定の) 事実はあると推定される。

「ようだ」の基本的な意味：

～という外見・様子である。～である印象を受ける。

なお、ここでは扱わないが、「みただ」も「ようだ」とほぼ同義の表現と考えてよい。

以下においては、実際の用例の観察を通じ、種々の事実が上の一般化によれば自然な説明を与えられることを見ていく。次の3～4節では、「らしい」と「ようだ」のそれぞれの意味・用法について考察し、随時、両者の相違に言及する。5節では、寺村氏以来の抽象的な意味特性に基づく分析の問題点を述べる。6節は、「らしい」と「のだろう」の関係についての補足的な議論である。

3 「らしい」

3.1 推定の根拠

「らしい」はある根拠に基づく推定を表すものであることから、実際の用例においても、その推定の表現の前か後に、根拠となることがらが表現されていることが非常に多い。

まず、次のような例では、先に根拠が述べられ、それに推定が続く形を取っている。

- (1) やおら男たちが数種類の太鼓を持って現われる。動物の角でできた笛がブアオーとほら貝のような音をあげた。いよいよ祭りの始まりらしい。(アフリカ)
- (2) アニータは、わたしの手から綿を受け取ると、糸をくり出し、粘土球の上に巻きつけた。糸を作って見せようとするつもりらしい。(マヤ)

次のように、根拠と推定とを単一の文で表現している例もある。

- (3) 木造住家にペンキが塗ってあり、文明の影響がかなりおよんでいるらしい。

(シルクロード)

- (4) 十七世紀になってチベットの僧侶ラム・サプトが、ブータンに宗教界の指導者として移り住んだところを見ると、チベットとブータンの交流はかなり前からあったらしい。

(チベット・ブータン)

以上のような根拠-推定という順序が基本的な排列と見られ、用例の頻度も高いが、これとは逆に、推定が先で根拠が後になっている場合も少なくはない。

- (5) 神父が数日前より、日本からイシャが来ると近くの村にも声をかけていたらしい。二山三山越えて自称病人がやって来ていた。

(フィリピン)

- (6) わたしたちと一緒に食事をしていると、モルジブ人はわたしたちが日本人か朝鮮人かみわけがつきにくいらしい。かれらの中の好奇心の旺盛な者はわたしたちにどちらなのか、とたずねてくる。

(モルジブ)

推定と根拠をこの順序で同一文中に表現しようとする、次のような「～らしく～」という言い方になる。

- (7) 二階にある私の家の鳩の巣を、四階の窓からみていたファルハッドは、羨ましかつたらしく、時々家へ来て、鳩をみせてくれといった。

(イラン)

- (8) 町の近代化が行われている最中らしく、到るところ工事場の感じである。日本より春は遅いらしく、街路樹の緑はまだ浅い。

(西域(上))

また、次のように、推定の表現の前後それぞれに根拠となることがらの表現を伴うものもある。根拠-推定、推定-根拠という二つの順序の表現が組み合わされたものと言ってもよからう。

- (9) その晩の礼拝は特に大きなものであった。どうやら巡回のエライ牧師がまわってきたらしい。普段の日の牧師と服装からしてちがう。

(メラネシア)

- (10) フツツと泡を吹いている地面には鉄サビのような層ができていた。よほど湯に鉄分が多いらしい。ところどころ土が変色している。

(メラネシア)

以上の場合とは異なり、推定の根拠が表現されていない用例もある。これには二通りの場合があるが、いずれにおいても、根拠が言語的に表現されていないというだけのことであって、「らしい」を用いて表現された話し手（書き手）の推定が、ある根拠に基づいていることには変わりがない。その第一の場合は、次に示す例のように、話し手が自分の目で見るとして得た情報が推定の根拠となっている場合である。

- (11) わたしはその時、なぜかれがげげんな様子で、露骨に紙をとりあげ「こちらに來い」と別室に連れて行くのか、その意図がわかりかねた。部屋に入ると別の男が椅子に坐

っている。上司らしい。何事かスリランカ語で二人は話しあった上、「もう一度金をみせろ」という。(モルジブ)

(12)畑地は斜面にあって、階段耕作をやっていたが、いよいよブータン人たちの生活圏内に來たのだと思うと、心が高ぶってきた。遠いのははっきりしないが、畑で黄金色にひかっているのは麦らしかった。(チベット・ブータン)

3.2 伝聞

推定の根拠となることがらが表現されない第二の場合は、他から聞いた情報が根拠となっている場合である。一般に「らしい」の伝聞の用法と呼ばれているものに相当する。

(13)係官もただコンパートの中をのぞくだけで、所持金のことは何もいわなかった。持出禁止のルールをもっていると事実上取上げられるらしいが、しかし二ルール位はかまわぬということだろう。(アジア・ヨーロッパ)

(14)寺林さん自身は(洞窟があるという噂を)知らなかったが、現地の人に声をかけてくれた。知っている男がいた。ムンダの山手にあるらしい。洞口は背より高く、水が流れ出ているという。(メラネシア)

次のような例では、情報の出所が「～によると」「～によれば」の形で明示されている。

(15)陳舜臣さんの『シルクロードの旅』は陳さんが数年前にここを訪れたときの紀行で、詳しい説明がある。それによると、住職のことを阿^{アフン}渾といい、最長老の方はマハメッド・ハジさんというらしい。(シルクロード)

(16)モルジブ人の仕事ぶりは、タンカーにモルジブ人と共に一航海同乗した髭(というニックネームの男)や日本水産の松村さんらの話によれば、まるで遊びながら仕事をしているように、日本人の眼には映ってしまうらしい。(モルジブ)

この伝聞の用法では、話し手が推定を行っていると言い難いようでもあるが、「らしい」の使用の裏には、他から聞いた情報をもとにして事実はどうであろうと推定しようとしている話し手の心理があると見てよいのではないと思われる。

3.3 事実の推定

さて、「らしい」は話し手またはそれ以外の誰かが現にそうであると推定している場合にだけ使われると言ってよい。これに反する次のような用例は、現代の会話や文章ではまず見られない。

(17)貞吉は、別に女の誘^{いざな}つた訳でもないのに、誘^{いざな}はれたやうな心持で。最初から此処で食事すると決めても居たらしく、日頃の不決断とは全反対。先に立つて戸口の引手を探り、構はず空いて居るテーブルに坐つた。(永井荷風「ふらんす物語」)

(18)温い、透明な朝の光線は、何時も纖弱^{あした}い人類^{かよわ}に向つて、尽きざる健康と力を進めよう

と勤めるらしく、縫子が枕元の明けた窓から、一ぱいに差込んで来て、葉の匂に籠められた不快な室の空気を、忽ち新しく快活にしてしまった。(永井荷風「新任知事」)

(19)やがて(役者である)亭主が帰つて来た。役者の紋をつけた双子縞の羽織は着てゐるが、どこか近在の者で、もあるらしい身体付から顔立まで芝居者らしい所は少しもない。(永井荷風「雪解」)

(17)と(18)では、明らかに、貞吉は最初からその店で食事をする決めていたと考えられているわけではないし、朝日の光が人類に「尽きざる健康と力を進めようと勤め」ていると推定されているわけでもない。(19)の例は若干微妙だが、役者である亭主を実際に「どこか近在の者」と推定しているのではないと思われる。こうした「らしく」「らしい」は、現在ならば、「かのように」「かのような」と表現されるところであろう。

ちなみに、「らしい」の使用が、現にそうであると推定されている場合に限られるというのは、いわゆる接尾語の「らしい」——「その物の典型的な性質を示している」という意味を表す——についても言えることである。したがって、「彼の男らしい態度」とは言えるが、「彼女の男らしい態度」はあり得ない。⁴⁾「らしい」を否定形にしても事情は同様で、「彼の男らしくない態度」はよいが、「彼女の男らしくない態度」は不可能である。この意味で、次のような用例は例外的である。

(20)(ルービン氏の)前歯のつきでた口もとは、いかにもビーバーそっくりで、そのうえ、実業家にはつきものの鼻ひげが、あっちむきこっちむき、ぴんぴんとおっ立っているため、ますますビーバーらしかった。

(ポール・ガリコ(亀山龍樹他訳)「ハリスおばさんモスクワへ行く」)
実際にはビーバーではないのに、「らしい」が用いられている。しかし、「ビーバーそっくり」という文脈設定に支えられていることを考えに入れると、重大な例外と見るには及ばないであろう。また、

(21)一等切符で二等に乗るのはばからしいようでもあるが、ヨーロッパで一等車に乗るのは比較的金持のお年寄りか、ユーレイルパスをもった日本人やアメリカ人なので、これでは旅は面白くない。(アジア・ヨーロッパ)

においては、一等切符で二等車に乗る自分のことを、本当にばかだと考えているわけではなからう。その限りでは(21)も例外的と言えるが、「ばからしい」は、もはや「ばか」と接尾語の「らしい」に分解しては考えられないほど慣用化が進んでいるものと言うべきかも知れない。

この小論で問題としているいわゆる助動詞の「らしい」に話を戻すと、「らしい」を用いた推定の表現には、「どうやら」「どうも」が典型的な修飾語として伴うことがある。

(22)この船、よく見るとあちこちに日本語が残っている。どうやら瀬戸内航路あたりに使

われていたらしい。

(メラネシア)

(23)バマコの空港には夜到着した。どうも私は、夜に着く巡り合わせになっているらしい。

(アフリカ)

「よほど」「よっぽど」による程度の強調を伴うものもある。⁵⁾

(24)よほど粘性の低い溶岩だったらしく、固まった表面にもあまり凹凸がない。

(メラネシア)

(25)そのタロイモがすごい。(中略)その葉は畳半畳分はあろうかという代物で、茎は大人の太腿くらいある。高さも二メートル近くあるかと思えるほどなのだ。(中略)よっぽど成長条件がいいらしい。

(メラネシア)

3.4 接尾語の「らしい」との区別

いわゆる接尾語の「らしい」は、上述したように、ある物であることが分かっている対象について、それがその物の典型的な性質を示しているということを表現する。

(26)それでも(オリエント急行は)さすがに国際列車らしく見送りの人は少なくない。

(アジア・ヨーロッパ)

(27)アビジャンは外国人の多い洗練された都会らしく、その手の店がたくさんある。

(アフリカ)

この接尾語の「らしい」と助動詞の「らしい」は表面的には区別が付かないこともあるが、通常、どちらであるかは文脈から明らかである。両者のあいだには、表す意味の違いに加えて、次のような違いがある。

第一に、動詞や形容詞などにも自由に付き得る助動詞の「らしい」とは異なり、接尾語の「らしい」はほとんど専ら名詞に付く。

第二に、接尾語の「らしい」を含む「あの男は実に男らしい」の音調は、通常、「～オ「トコラシ」イ」のようになる。これに対し、助動詞の「らしい」を含む「向こうからやって来るのはどうも男らしい」では、「～オ「トコ」ラ「シ」イ」という発音が基本的だと思われる。

第三に、助動詞の「らしい」が連体修飾に用いられるときには、次のように「らしき」という形も使われる。

(28)いまでも山らしき姿はみえないが、この上り勾配は明らかにウラル峠(?)だ。

(アジア・ヨーロッパ)

(29)海岸は泥の広場。巨大な原木があちこちに積み上げてある。その奥には自動車修理工場らしき建物があり、トラクター類が何台も無造作に置かれていた。(メラネシア)

他方、接尾語の「らしい」を「らしき」という形にした例は見当たらなかった。

第四に、接尾語の「らしい」では、「XらしいX」という言い方が可能である。

(30)何はともあれ、最初の洞窟らしい洞窟だ。

(メラネシア)

(31)山系、次第に近づいてくる。アップ・ダウン烈しい丘陵地帯に入る。殆ど道らしい道はない。

(西域(上))

これに対し、助動詞の「らしい」がこのような形で用いられることはない。これは、「Xであると推定されるX」という表現内容の不合理性によるものとして理解することができる。

4 「ようだ」

4.1 外見・印象

「ようだ」は、基本的に、外見や印象がどのようなものであるかを表現するものであって、ある根拠に基づいた事実の推定を表現するものではない。このことから考えて当然のことであるが、根拠-推定、推定-根拠といった構成にはなっていない用例が多い。外見や印象を、言わば単刀直入に表現するだけである。

実際の用例としては、まず、次のように、主に視覚を通して得られた外見・印象を表現するものがある。

(32)(洞窟の)奥をすかしてみると、ずっと急斜面が続いているようだ。とても行けそうにない。

(メラネシア)

(33)感心しているうちに列車は発車し、しばらく上海市内を走ると、速度をあげて一路水田地帯をすすむ。水田の作物は野菜類が多いようだ。

(アジア・ヨーロッパ)

次のような例では、視覚以外の感覚によって得られる印象が表現されている。

(34)その時どこかから歌声が聞こえてきた。姿はまるきり見えないが、何か高い所から聞こえてくるようだ。

(アフリカ)

(35)セネガルの代表的料理、チュブゼン。初めて食べた時は感激した。(中略)病みつきになってしまった日本人が、一カ月の間こればかり食べ続けてさすがに食傷したという日くつきの食べ物。確かに日本人の舌に合うようだ。

(アフリカ)

(36)十月の中国東北地方の朝はすでに寒く、列車の暖房がまだよくきいていないようだ。

(アジア・ヨーロッパ)

また、次の例のように、感覚に基づく表面的な印象というより、ある程度の総合的な思考を経て得られる印象を表現するものもある。もっとも、思考の結果とは言っても、(32)～(36)のような例とのあいだに絶対的な区別が立てられるわけではなく、程度の問題である。

(37)私は腰までの草をかき分けながら進んだ。踏む石が簡単に碎けた。サンゴ質の石灰岩のようだ。

(メラネシア)

(38)この数日で、当時ホニアラに滞在していた在留邦人のほとんどに会ってしまったよ

うだ。ソロモンという国の知名度から考えると案外多かったが、それでも十数人。

(メラネシア)

- (39)西欧人の赤ちゃんが、見事なまでに、目鼻立ちを整えて生まれてくると較べると、東洋系の新生児は誕生後に徐々に顔らしさを整えるようだ。(シドニー)

4.2 「らしい」への接近

上の(37)～(39)に見るような思考的な面が強まり、得られた情報に基づいて事実を推定するという話し手の意識を伴う場合には、「らしい」に近い用法となる。

- (40)他にもいろいろな神話伝説がからんでいるところを見ると、シンボは単なる南のはずれの小さな島ではなかったようである。(メラネシア)

- (41)黒い(島の)影の上の方に、点々と灯が動いている。島の北の山から松明を持った行列が降りて来るようだった。山の上には湖があるはずだ。湖からの帰りだろうか。(メラネシア)

「らしい」と同様、「どうやら」や「どうも」を伴うこともある。

- (42)わたしたちのボートにむかって、夜おそくまで子供たちが浜辺で歌をうたったりしてさわいでいる。どうやらこの島にくと子供の夜遊びなどは親が問題にすることではないようだ。(モルジブ)

- (43)葦壁の部屋は、居間のようだ。手作りだけど、テーブルと椅子がある。どうも、家主さんは物持ちのようである。(マヤ)

また、次のような「～ようで～」という構造は、「～らしく～」のそれに相当する。⁸⁾

- (44)壮大な朱塗りの門の前でバスから降りたが、ラサでは外国人であるわたしたちが珍しいようで、すぐにそろそろと人が集まり、たちまちの間に二重三重の人垣に囲まれてしまった。(チベット・ブータン)

- (45)ラサでもトラックと自転車が人びとの重要な足になっているようで、人が鈴生りに乗ったトラックが走っていたし、無灯の自転車が道にあふれていた。(チベット・ブータン)

このように、「ようだ」は「らしい」の領域に重なってはいく。しかし、「ようだ」が「らしい」と同じように使われることがあるにしても、それはあくまでも、外見や印象を表すという「ようだ」の基本的な働きの一つの現れ方に過ぎないものと思われる。

実際、「あれは飛行機らしいが、実はそうではない」という表現が無理であるのに対して、「あれは飛行機のようなようだが、実はそうではない」と言うことは普通に可能である。このことは、「らしい」に近い用法においても、「ようだ」は、事実の推定の表現になりきっているわけではなく、外見や印象の表現としての性格を残していることを示している。次は、そうした実例

である。

(46) (被害者の) 書類鞆と上着の財布がなくなっている。(中略) 強盗のようだがそうでないところもあった。(松本清張「分離の時間」)

(47) 彼は、熱心に新聞を読んでいるようで、実はそうではなかった。彼の目は、新聞の端から頼子の後ろ姿と、小野木の顔とを観察しているのだった。

(松本清張「波の塔」)

要するに、外見や印象は事実とは食い違っているけれどもよいわけで、このことから、「ようだ」は比喩(または、比況)の名で呼ばれる用法を持つことになる。

4.3 比喩

比喩を表す「ようだ」の用例としては、次のようなものが挙げられる。

(48) 食べてごらん、といたげに、一握り(のコーンフレーク)をわたしに差し出す。掌に受けて口元に運ぶと、黴臭い。ひとつまみ噛んでみるが紙のようだ。(マヤ)

(49) 山の中腹にある村には、涼しい風が終日あって、勢い込んで逃えてきた熱帯服は拍子抜けである。摂氏三十二度のマニラの日中が嘘のようである。(フィリピン)

(50) 北京車站は北京、大連等これまで乗降したどの駅よりも貧弱に見える。バスから降りて駅前へ行くと露天市場の入口を入れてゆくようである。(アジア・ヨーロッパ)

比喩と比喩でないものとの区別は絶対的なものではない。例えば、次の例などは話し手の意識においても、どちらか一方であって他方ではないと言い切れるようなものではなからう。

(51) ぐっとあおった冷たいビールのおいしさは、二ヵ月近いジャングル暮らし、サンキンテン以来の疲れがすーっと薄れて行くようだった。(マヤ)

もっとも、次のように、「まるで」「あたかも」「さながら」「ちょうど」といった表現の使用から、比喩の意味であることが明らかな場合もある。

(52) 草原といっても背の丈二、三メートル、茎だって直径十センチ以上あるような巨大な草である。まるで竹林の中のようだ。(メラネシア)

(53) 夕方になると家々でたく炭火の煙が森に漂って、あたかも霧が発生したようだ。

(モルジブ)

(54) 右手にダムのような大きな貯水池が現れてくる。灌漑用のダムなのであろう。地盤は波立っており、左手の波立ちは宛^{さな}ら海のようである。(西域(上))

(55) 海から眺めるシドニーの色彩豊かな風景は、ちょうど眼前に一枚の水彩画を立てかけられたようでもあった。(シドニー)

また、「かのようだ」という形を取るものも、比喩を表すことが多い。⁷⁾

(56) 美しいコーラスやランプの下で行われる幻妙な儀式の様子をながめっていると、なにか

うっとりとしてくる。彼らの宗教的悦楽がのりうつったかのようなだ。(メラネシア)
事実の推定を表す「らしい」が、こうした比喻を表現するのに用いられることはあり得ない。

4.4 矛盾する外見・印象

「ようだ」は基本的に事実——これは、ある意味で一義的であると言える——の推定に関わるものではないことから、互いに矛盾する二面を持つ外見や印象を表現することも可能となる。

(57)整理をしてしまうと、これまでの自分の生活が終わったような感じだった。長い経験のようだったし、過ぎてしまうと、それがひどく短い間のようでもあった。

(松本清張「波の塔」)

(58)(美禰子の言った)迷へる子といふ言葉は解た様^{わかっ}でもある。又解らない様^{ストレイシープ}でもある。

解る解らないは此の言葉の意味よりも、寧ろ此の言葉を使つた女の意味である。

(夏目漱石「三四郎」)

特に、「分かったような分かっていないような顔」「会いたいような会いたくないような気持ち」のように、「XようなXないような」という形の表現の例は少なくない。

(59)子供用の鳥の本を息子の部屋から持ってきて、あの鳥は何の鳥かと調べたが、どの鳥も挿絵にあるような、ないような感じがして、山鳩かと思うと山鳩でないらしく、遂に諦めてしまった。

(遠藤周作「ぐうたら漫談集」)

(60)刑事事件のほうも「裏づけが弱く、事件となる見込みがない」という、わかったよう
なわからないような、上からの「判断」で打ち切りになったことがある。

(松本清張「けものみち」)

(61)こうなる(=せっかく来たのに、遺跡の見学は無理だと言われる)と、どうすることもできない。私の質問に対しては、アティク・クルバン氏に替って、古文物関係のポストにある若い人が答えてくれたのであるが、納得できるような、できないような複雑な気持であった。

(西域(上))

また、「泣いているような笑っているような顔」「うれしいような悲しいような結末」「ほめているようなばかにしているような口ぶり」のように、「XようなYような」という形をした言い方も可能である。

(62)私が(入学試験を)受けた学校は総計十校に及ぶが、そのおかげで日本の地方都市をまわった。地方都市にいくたびに、私は「ああ、ここも受けに来た。」という哀しい
ような懐かしいような気持になる。

(遠藤周作「ぐうたら漫談集」)

(63)それから約一年十か月、息子は日本人学校に学んだが、昭和四十九年十一月、日本に戻って転校した横浜の小学校の担任の先生から、「外国帰りの子どもから、これほど正しい標準語の日本語を聞けるとは、夢にも思いませんでした…」感心したような、

あきれたようなコメントをもらい、こちらの方も妙な気持ちを味わった。

(シドニー)

以上のように矛盾する外見や印象を表現するのに、「らしい」が用いられることはまずない。これも、「らしい」が事実の推定の表現であることを考えれば自然に理解できることであろう。もっとも、「も」を含む「～らしくもあり～ないらしくもある」のような形ならばあり得るように思われるが、実例は見つからなかった。

4.5 婉曲

話し手はあることがらを承知しているのに、それを断言するのを避け、「ようだ」を用いて婉曲に表現する場合があることが知られている。次のような例がそうである。

(64)「どうやら砂嵐は収まったようですね」と、同行者の一人は言った。(西域(上))

(65)列車は速度を落した。構内の線路が多くなってくる。「着いたようですな。」

(松本清張「落差」)

「砂嵐は収まった」「駅に着いた」と言い切るのを避け、そのような印象があると控え目に表現しているわけである。

このようなものは一般に「ようだ」の婉曲の用法として記述されるが、婉曲の用法とは言っても、先に述べた「ようだ」の基本的な意味に基づいた範囲でのみ可能になるものだということに注意しておくべきであろう。婉曲に表現したければ、無条件に「ようだ」が使えるというわけではないのである。例えば、「お金を貸してもらえませんか？」という依頼を婉曲に断わりたいからと言って、「ちょっとだめなようです」とは言うことができない。お金を貸すかどうかは、話し手自身が決定することであって、外見や印象として受け止めるような性質のものではないからだと言えよう。

4.6 「らしい」に代えられない「ようだ」

「ようだ」は使われるが「らしい」は使えない二、三の場合にはすでに言及したが、そのほかにも、以下のような場合の「ようだ」が「らしい」に置き換え難い。

まず、知覚によって得られる表面的な印象を表現する場合がそうである。

(66)「顔色がよくないようですな。」(松本清張「落差」)

(67)「先生、何かご用がおありになるんですか?」「うむ、まあね……。」「さっきから時計ばかりご覧になるようですよ。」(松本清張「落差」)

話し手は、見ての印象をそのまま述べているだけで、事実を推定しているのではない。

話し手の自身感覚や心情などを表現する場合も同様である。

(68)「山口。車を呼んでくれ。どうも寒気がするようだから、さきに帰るよ。」

(松本清張「雑草群落」)

(69)そのうちに徐々に、天山は（飛行機の窓の外に）その巨大な姿を現し始める。十一時四十五分である。いよう！と声をかけてやりたいようである。（西域(上)）

これも、話し手の気分を表しているのもであって、事実の推定ということとは無関係である。

次のように、話し手の下す判定や評価を表現している場合もそうである。

(70)（この詩は、詩人が）辺境の将兵に代って、その心情を歌った詩であるから、その場所がどこであるか詮索しても始まらないが、この詩には、この辺の黄河がびったりするようだ。（西域(下)）

(71)デパートでは、下着類など、ビニール袋に入っているのを出してみようとして「ナコン（してはいけない）」といわれたことがあったし、棚から出すと、かたはしからかたづけるので買いにくかったこともあった。このようなサービスの方法は、日本のデパートに軍配があがるようだ。（イラン）

話し手は、この辺がびったりすること、日本のデパートに軍配が上がることを、自分の個人的な意見として述べているのもであって、そうした事実があることを推定しているのではない。

以上、どの例も、ある根拠に基づいた事実の推定を表現しているものではないという点で共通している。当然、「らしい」には置き換え難いことになる。

4.7 「ように見える」「ように思う」など

「ようだ」は、しばしば、「ように見える」「ように思う」を始めとする種々の形でも用いられる。「ようだ」の考察の最後に、そうした用例をいくつか挙げておく。

(72)男たちは漁にでかけているのか、部落にみかけない。女たちが大声でどなりあっている光景はまるで喧嘩をしているようにみえる。（モルジブ）

(73)テヘランの電話は、混線することが多い。まちがい電話も、日本より多いように思う。（イラン）

(74)心なしか家の前でほえる犬までが、デンバサールでみかけた犬のようなせわしさもなく、おっとりとした表情をしているように感じられた。（モルジブ）

(75)草原といっても背の丈二、三メートル、茎だって直径十センチ以上あるような巨大な草である。まるで竹林の中のようだ。ふと自分が蟻になったような気さえする。（メラネシア）

(76)「下を見ていると、まず北京から飛びだして、すぐ丘陵地帯の上へ出ますが、その山岳地帯を越えると、あとはほとんど沙漠ですね。まるで沙漠の上をえらんでいるような感じです。」（ゆく）

いずれも「ようだ」とほとんど同じ意味を表すが、これは、「ようだ」が外見や印象を表現するものであるため、「ようだ」自身の中に「見える、思う、感じられる、気がする」といった

意味が含まれていることによるものと言えよう。

5 抽象的な意味特性に基づく分析について

以上、「らしい」と「ようだ」の意味・用法について見てきた。ところで、この問題に関しては、近年、寺村氏の分析に端を発して一連の論考が発表されている。ここでは、この研究の動向について一言しておく。

寺村氏の分析においては、「らしい」と「ようだ」は、「推量の根拠となる情報が、自分自身の観察によって得たものか、それとも他から手に入れたものか」という基準などに関して異なるものとされている。しかし、以上の節で見てきたように、「らしい」と「ようだ」は、単にそうした何らかの一つ（あるいは、それ以上）の特性においてのみ対立しているものとは考え難い。両者はより深いところすでに意味を異にしていると言わなければならない。

要は、寺村氏の議論は、その出発点において、「らしい」と「ようだ」をどちらも、ある根拠に基づく推量を表すものと見てしまっているところに問題があると言える。それを前提としてそれ以外のところに相違を求める結果、上述のような基準を見出すよりほかないということになるものと思われる。

寺村氏の説を受け、それを補足するものとして導入されたのが、「心理的距離」の概念である。小論の立場からすると不適当な考え方に立脚している以上、この考え方も必然的に問題をはらんでいることになるが、これについても簡単に述べておく。

詳細については柴田氏、早津氏らの研究を参照されたいが、この説によると、話し手と問題の事態との心理的距離が「らしい」では遠く、逆に、「ようだ」では近いとされる。例えば、早津氏がこの距離の考え方をを用いて説明しておられる例の一つを見てみよう。

(77)彼女の表情が一瞬かげったようだ。何かいやなことを思い出したらしい。

早津氏の説明は、次の通りである。すなわち、始めの文では、話し手は「彼女」の表情の変化を視覚的に捉えて「外面の様子が「一瞬かげった」状態であると判断した」ものであるから「ようだ」が適当である。他方、後ろの文では、それを根拠として、「彼女」の心中を推量したわけで、「これは距離をおいた判断であるから」「らしい」で表される。

しかし、「距離をおいた判断」と言うことの意味が不明確である。詳しく検討する余裕はないが、問題点を突き詰めれば、寺村氏の場合と同様、(77)の二つの文がどちらもある判断を表すと見ている点にあると言える。しかし、小論の立場からすると、「ようだ」が判断や推量を表すと言うのは不適当である。(77)における「ようだ」と「らしい」の使い分けがどう説明されるべきかはすでに明らかであろう。最初の文で「ようだ」が使われるのは、話し手の受け取った外見・印象を表現しているからであり、続く文で「らしい」となるのは、それを根拠とし

て外面には現れていない事実を推定しているからにほかならない。

「らしい」と「ようだ」を区別するために寺村氏ほかによって提出された基準や概念は、目的によってはそれらを持ち出す意義があるとしても、それは「らしい」と「ようだ」の基本的な意味の相違に基づく派生的な現象として理解すべきであろうと思われる。

6 「らしい」と「のだろう」

ある根拠に基づいて事実を推定するという「らしい」の働きは、「のだろう」のそれに似ている。と言うのも、「のだろう」は、あることがらを受けて、その背後にどのような事情があるかを推量して表現するものだからである。⁸⁾ここでは、両者の置換可能性について簡単に述べておく。

事実、「らしい」の用例の中には、「のだろう」で置き換えることのできるものが多い。3節で挙げたものの中から一例だけ挙げる。

(5) 神父が数日前より、日本からイシャが来ると近くの村にも声をかけていたらしい。二

山三山越えて自称病人がやって来ていた。(フィリピン)

逆に、次のような「のだろう」は、「らしい」に置き換えることができる。

(78) ココヤシの木陰では婦人や子供たちが、こちらを見つめて、その中の幾人かの子供たちが小声で「コリア！コリア！」とささやいている。朝鮮の漁船がたちよったことがあるのだろう。(モルジブ)

(79) モスクの前は村人たちの溜り場になっているのだろう。数人が腰かけて、われわれ一行を眺めている。(シルクロード)

しかし、「らしい」と「のだろう」は常に置換可能なわけではない。例えば、次のような伝聞の「らしい」は「のだろう」では置換え難い。

(14) 寺林さん自身は(洞窟があるという噂を)知らなかったが、現地の人に声をかけてくれた。知っている男がいた。ムンダの山手にあるらしい。洞口は背より高く、水が流れ出ているという。(メラネシア)

この文で「のだろう」とできないのは、何かあることがらがあって、その背後の事情が「洞窟がムンダの山手にある」ことだという関係になっていないからだと言える。逆に、次のような「のだろう」は、「らしい」には変え難い。

(80) (温泉のあるアブギヤルメ村は)人口およそ二～三百という感じの小さな部落だ。ひなびた温泉宿という感じだ。日本の温泉村も昔はそうだったのだろう。数軒の宿がある。大体似たようなつくりだ。(イラン)

この「のだろう」の用法は、ある具体的なことがらの背後の事情を推量するものではなく、話

し手の意識内で問題となっている実情がどうであるかを推量するものである。⁹⁾(80)の「のだろう」を無理に「らしい」に変えると、アブギヤルメ村が小さな温泉宿の村だということに基づいて、日本の昔の温泉村の姿を推定するというおかしなことになってしまう。「らしい」に変えられないのは、そうした理由によるものと言える。

結局、「らしい」と「のだろう」の用法が重なるのは、あることがらがあって、その背後にある事実を問題とする場合だということになる。

なお、「らしい」が「のだ」的な要素を含んでいる——あることがらを受けて、そこから未知の事実を推定する——ということから、「のだ」と「らしい」をこの順序で組み合わせてできる「のらしい」という言い方は、構文上は問題ないが、意味的に余剰的なためか、実際の用例はきわめて稀である。

(81)試合の最中、気を付けて見ていると、左翼手と右翼手が、アウトを取るたびに、すこしずつ、中堅手の居る方角へ、ひつついて行ってしまうのである。(中略)これは、アウトを取るたびに外野の三人がぺちゃくちゃ喋るのが原因で、喋るたびに、知らず知らずのうちに互いに接近してしまうのらしい。(井上ひさし「家庭口論」)

このような「のらしい」は、一般には、「らしい」か「のだろう」のいずれか一方で表現されるところであろう。

7 おわりに

以上、「らしい」は「ある根拠に基づく事実の推定」を表すもの、「ようだ」は「外見や印象」を表すものとする旧来の見解に立ち返ることで、それぞれの意味・用法、両者の相違などの問題についての自然な理解が得られることを、様々な角度からの考察を通して見てきた。

なお、「ようだ」と用法上の重なりを持つ、いわゆる様態の「そうだ」については、別のところで論じている。あわせてご覧いただければ幸いである。¹⁰⁾

注

- 1) 岡本禹一氏編『日本語表現文典』(国際文化振興会、1944年、180～187頁)。
- 2) 時枝誠記氏『日本文法口語篇』(岩波書店、1950年、206～209頁)、阪倉篤義氏『日本文法の話』(創元社、1952年、253～254頁)、森田良行氏『基礎日本語2』(角川書店、1980年、503～509頁)、中畠孝幸氏「不確かな判断——ラシイとヨウダ——」(『三重大学日本語学文学』第1号、1990年)など。
- 3) 寺村秀夫氏「ムードの形式と意味(1)——概言的報道の表現——」(『文芸言語研究(言

語篇)』第5巻、筑波大学文芸・言語学系、1979年)、柏岡珠子氏「ヨウダとラシイに関する一考察」(『日本語教育』41号、1980年)、柴田武氏「ヨウダ・ラシイ・ダロウ」(国広哲弥氏編『ことばの意味3——辞書に書いてないこと——』、平凡社、1982年)、長嶋善郎氏「ヨウダ・ラシイについての覚え書」(『独協大学外国語教育研究』第4号、1985年)、早津恵美子氏「『らしい』と『ようだ』」(『日本語学』第7巻第4号、1988年)など。「らしい」や「ようだ」を題目に掲げたもの以外でも、同様の立場から両者の意味の相違に言及している最近の研究は枚挙に暇がない。

- 4) 明治期における接尾語の「らしい」の用例の中に、実際にはXでないものについて「Xらしく」を用いているものがあることを、鈴木英明氏「明治期以降のラシイの変貌」(『国語国文』第57巻第3号、1988年)が指摘しておられる。
- 5) 「よほど」「よっぽど」の用法の一つは、「らしい」の表す意味と深く関わっている。この点については、拙論「『よほど』の分析統制」(発表予定)を参照していただきたい。
- 6) もっとも、「～ようで～」という形の表現がすべて推定-根拠の関係を表しているわけではなく、次のような場合もある。

(a) (電話口で)あの……などと呻吟しているときに、分っていることを交換嬢がこたえてくれた。交換台であれ何であれ、通常の場合は盗聴されているようでいやなものだがこのときは有難かった。(アジア・ヨーロッパ)

この種の表現は「らしく」でも可能であろうが、該当する用例は見つからなかった。

- 7) 単純に比喩を表すとは言いがたい「かのようだ」の用例もある。

(a) (踊っている)女たちは笑っていた。全身が愉悅に輝いていた。くるとまわり、目まぐるしく手を交差し、生きていること自体をせい一杯享受しているかのようであつた。(北杜夫「月と10セント」)
- 8) 詳しくは、拙著『現代日本語の文法Ⅰ——「のだ」の意味と用法——』(和泉書院、1990年)の第2章と第5章を参照していただきたい。なお、「らしい」と「のだらう」の意味の類似に関しては、奥田靖雄氏「おしはかり(二)」(『日本語学』第4巻第2号、1985年)にも議論がある。
- 9) 上掲の拙著を参照していただきたい。
- 10) 拙論「現代語における予想の『そうだ』の意味について——『ようだ』との対比を含めて——」(『国語語彙史の研究 十二』、和泉書院、1991年)。

(用例の出典)

引例に際しては、一部のものを除き、下記の下線部分を出典として示した。なお、一部の漢字の書体を改めたほかは、すべて原文の表記に従った。

中尾英俊「アジア・ヨーロッパ歩き録」(勁草書房)

板垣真理子「おいでよアフリカ——西アフリカの街と祭と女たち——」(晶文社)

大野正雄・大野はるみ「イラン見聞録」(泰流社)

遠藤雅子「シドニーの午後——My days in Australia——」(三修社)

樋口隆康「ガンダーラへの道——シルクロード調査紀行——」(サンケイ出版)

井上靖「私の西域紀行 上巻」「同 下巻」(文芸春秋)

野添憲治「秘境への旅——チベット・ブータン紀行——」(無明舎出版)

妹尾恭一「フィリピン僻地紀行——少数民族マンギャンを旅して——」(連合出版)

若林美智子「最後のマヤ民族」(新潮社)

田中淳夫「不思議の国のメラネシア——南太平洋探検の旅——」(彩流社)

藤沢高治「インド洋の小さな国——モルジブ諸島文化誌——」(晶文社)

井上靖・司馬遼太郎「西域をゆく」(潮出版社)

(たのむら ただはる, 大阪外国語大学講師)